

## 書評

児玉聡著

『実践・倫理学——現代の問題を考えるために』

(勁草書房、2020年)

長門 裕介

本書を最後まで読み通すのは私にとってはそれなりに辛い体験であった。それは私が、「こんな授業をしてみたい」と日々四苦八苦し、「(もし機会があるなら)こんな入門書を書いてみたい」と漠然と構想していたものが、ほぼ理想的な形で具体化されているのをまざまざと見せつけられたからである。どんな人にとっても自分の仕事が他人の劣化版に過ぎないことを知らされるのは辛いものである。

しかし、それはある意味で当然のことかもしれない。私は学生のときから今に至るまで、著者のこれまでの著作や論文、論説記事、果てはHP上で公開されている「哲学・倫理学用語集」に至るまで、多くのことを著者から学んでいるからである。

本書がなによりも重視しているのは、何らかの道徳的立場を提示するときにそれが「よい理由 good reason」に基づいているかどうかを吟味すること (p. 15) である。このような思考法こそ、学説史の理解と並行して、(あるいはそれに優先して、) まず初めに身につけるべきものであることは倫理学の教育に携わる者の多くが同意するところだろう。さらに本書では、それを身につけるための現実の倫理問題も選び抜かれたものが採用されている。死刑、安楽死、ベジタリアニズムといった馴染みやすい問題から始めて、善行義務や動機の価値、法と道徳の関係へと至る構成は、実際に多くの学生が気にしているものである。それぞれの議論も、問題の提示から可能な立場の検討、暫定的ではあるが現実的な結論へと丁寧に進む。想像でしかないが、痒いところに手が届く本書の記述は、著者が授業の中で学生の疑問やコメントに真摯に向き合うことで洗練されていったものであろう。本書は倫理学を教える側にも多くのことを教えてくれる。

このように、私は本書の目的や方法についてい

かなる不満も抱いてはいないし、各論についても基本的には十分説得力のあるものだと考えている。以下のコメントは読書中に「あえて言うなら」という視点から考えたことである。

第一に、一読して分かるように本書は極めてカントに厳しい。もちろん、『基礎づけ』をベースにカント倫理学を解釈する本書の記述は、評者のみるところ標準的なものであり、特にアンフェアなものではない。しかし、オノラ・オニール『理性の構成』(法政大学出版局、2020年)のように、定言命法は道徳的に許容可能な選択を提示する役割しかなく、行為の具体的で外的な側面を指導するものではないとし、むしろ行為者を真に実践的な行為者たらしめる格率を重視する解釈を取れば、「1か0かというカントの発想」の問題点は緩和されるかもしれないし、本書第7章の「善いことをする義務」については単なる互恵性とは異なる理解が得られるだろう。

第二に、本書はいくつかの重要な部分で制度や運用上の対応の必要を訴えるが、これについてより踏み込んだ考察が必要かもしれない。たとえば安楽死についてそれが本人の自発的な同意かどうかを確認する規則や事後的なチェックを検証する仕組みが必要とする部分 (p. 111)、「津波でんでんこ」の後の精神的なケアの必要性に触れる箇所などである。私もこのような制度は必要だと思うが、この必要性は単に効用の観点ではなく手続き的公正さの価値などとも関連するように思える。あるいは、当事者が行為の事前事後ともに激しく葛藤するケースにおいてその対処を制度的な運用に訴えすぎると、倫理学が問題とできる範囲をいたずらに狭くしてしまうとも言えるだろう。単に可能なリスクを減らす意味合いだけでなく、まさにそのような制度があることの積極的な価値を知りたいのではないだろうか。

これらはないものねだりであるだろうし、このコメントを取り入れたらむしろ全体の完成度が落ちてしまうかもしれないものであることは承知している。しかし、これは教場で倫理学を教えながら自分自身がいつも悩んでいることとして切実なものではあることは確かである。